

今日は今年最後の日曜日です。私はこの一年のことをよく思い起こすのですが、皆さんはいかがでしょう。今年はいろいろとたいへんな一年でした。私には今までに、「やっと一年が過ぎた。来年はもっと良い年になってほしいものだ」と思って大晦日を迎えた年もあります。身近な人を亡くしたり、辛い試練に遭ったり、多忙すぎたりといった年でした。

一年を終えようとするとき、大切なことは何でしょう。私たちは一年をどう過ごしたのでしょうか。

自分の人生の意味は何だったのだろうかという自問する日が誰にもやってきます。何か価値のあることを成し遂げられたらどうか、と。人生を振り返って、やってよかったという充実感を味わえるものは何でしょう。やり直したいと思うことは何でしょう。

この聖書箇所、パウロは人々に別れを告げます。彼の走るべき道のりは終わりに近づいたのです。

テモテ第二 4:6 「私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来しました。

これを記したとき、パウロはローマにいました。このみことばが書かれた時期に関して、聖書学者の間でさまざまな意見がありますが、亡くなる少し前だったという見解が主流です。パウロはローマに行くことについて預言を得ていました。そこで死ぬことを知っていたのです。パウロは自らの命が終りに近づいたことを、おそらく聖霊によって知らされたのでしょう。

それでもパウロは恐れおののいてはいませんでした。キリストのために死ぬことを光栄に思い、ピリピ人への手紙では、この命を離れてイエスとともにいられることを楽しみにしていると語りました。ピリピ 1:21-23 「1:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。 1:22 しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。 1:23 私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」

最後の部分、23節に注目してください。パウロは、生きることと死ぬことのふたつに板挟みとなっていると言います。彼は、世を去ってキリストとともにいたいと言います。そのほうがこの世にいるよりもはるかに良いと言うのです。皆さんも同じように思いますか。

「去る者は日々に疎し」ということわざがあります。身近でない物事や人のことは考えなくなるという意味です。私たち人間は五感で感じる物質の世界に生きていますが、同時に霊の生き物でもあります。人間の存在とは、体とその体内で起こる化学反応がすべてではありません。そこには、霊的な側面があります。ただし、霊的な側面は、五感で感じられるものではないため、見過ごされがちです。物質と霊というふたつの領域がありますが、目に見えない霊の領域こそ永遠のものです。

キリストとともにいることにまさるものではありません。「驚くばかりの」という賛美歌の4番の歌詞は「御国につく朝いよよ高くめぐみのみ神をたたえまつらん」と歌います。私はこの歌詞が大好きです。英語の原詩には、「御国に行って1万年経っても太陽のように輝き、神への賛美をいつまでも歌う」とあります。

パウロは、注ぎの供え物となったと言います。彼は自分自身と持てる物すべてとを神にささげました。そして、ささげ切ったのです。

出発の時が近づきました。出発と聞いて、皆さんは何を思い浮かべますか。飛行機でどこかに行くことを考える人もいるでしょう。皆さんは、出発ロビーの搭乗ゲートで何時間も飛行機を待ったことがありますか。

私には、印象深い出発の思い出があります。8年前の今頃でした。家族でクリスマスを祝っていると、アメリカにいる兄から電話がありました。父が危篤だから、すぐにインディアナに戻るよという知らせでした。医師は、父が新年を迎えられるかどうかかわからないと言ったそうです。父はすい臓がんで、すでに肝臓にも転移していました。私は、父が亡くなる前に帰って、数日間いっしょに過ごすことができました。父に別れを告げたことを今も覚えています。私は日本に帰らなければなりません

でした。病院を後にする私を、父は車椅子に座って見送ってくれました。この世で父と会えるのはこれが最後だと私はわかっていました。その約1週間後、1月12日に父は天へと旅立ちました。

父は、旅立ちを楽しみにしていました。87歳だった父は、そのほとんどの人生をクリスチャンとして歩きました。父は謙虚で誠実な人でした。父は、聖職者へと召されているのかと考えたこともありましたが、そうではなかったようです。けれども、父はその生き方をおして日々神に仕えました。職場だった店で神に栄光を帰しました。教会では、日曜学校や男性の集会の奉仕に携わりました。また家庭においても、エペソ6:4にある、子を愛し、主の教育と訓戒によって育てなさいというパウロの言葉を実践しました。

私の父は、人生を振り返って満足することができました。けれども父は繰り返し私にこう言いました。「お父さんとお母さんは完璧な両親ではないけれども、いつも子どもたちのために祈ってきた。私たちの過ちを神が覆ってくださるようにと。」父はもちろん完璧ではありませんでした。けれども、完璧な人などいるのでしょうか。父はすべてにおいて聖書に忠実であろうと努めていました。それは私たちに出来得る最善です。

7節にはこうあります。「**4:7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。**」

クリスチャンの人生を表すのに、「勇敢に戦う」や「走るべき道のりを走る」といったたとえが他の聖書箇所でも使われています。海辺でカクテルを飲む、とか、温泉でのんびりする、というようなたとえはクリスチャン人生にはあまり用いられません。海辺や温泉が悪いと言っているのではありません。私が言いたいのは、クリスチャンにはこの世の人生で多くのうれしいこともあります、苦しいこともあるということです。

私たちの人生は忍耐の連続です。耐え忍ぶには、勇気と力と献身が必要です。私たちはキリストにあって勝利を得ていますが、走るべき道のりを走り、勇敢に戦わなくてはなりません。サタンも悪霊たちも、私たちが打ち負かされるのを待っています。私たちが負けの人生をうつむいて生きる姿を見たいのです。パウロは敗北感と戦ったのでしょうか。信仰を持ち続ける努力が必要だったのでしょうか。パウロにとって、それはたいへんな課題だったのでしょうか。

そんなことはないだろう、と思う人もいるかもしれません。パウロです。新約聖書の半分を書くのに神が用いた人です。そんな人が信仰を持ち続けるのに苦労したとは思えません。

パウロがクリスチャンになった経緯を覚えていますか。イエスは、奇跡を用いてパウロを打たれました。パウロはそのせいで3日間目が見えませんでした。彼が断食して祈ると、神はパウロのために祈ってくれる預言者を送ってくださいました。パウロの目は癒され、こうしてパウロはイエスに従う者となりました。このような救いを経験した彼が、誘惑されたり信仰が揺らいだりすることがあるのでしょうか。

パウロは天国に連れていかれ、すばらしすぎて言葉では言えないことを聞きました（コリント第二12:2-4）。スーパークリスチャンがいるとすれば、それはパウロでしょう。

パウロは疑いを持ったことがあったのでしょうか。きっとあったはずですが。パウロは信仰を持ち続けることが戦いであり、競走だと言いました。つまり、葛藤して戦わなければならなかったのです。パウロでさえ疑いを持ったのなら、どのクリスチャンにもその可能性はあります。疑いをもって、「私はどうかしてしまったのだろうか」と後ろめたく感じたことはありますか。そんなふうを感じることはありません。

ペテロ第一 5:8-10 「5:8 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。 5:9 堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。 5:10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」

ペテロ第一は、同じようなことがすべての信徒に起こると言います。けれども、しっかりと信仰をもって悪魔に立ち向かいましょう。9節は、世界中のクリスチャンが同じような苦しみを味わってい

るのだから、頑張っって耐えましようと言ります。そうすれば、神がその経験を用いてあなたを強め、完全な者としてくださいます。

信仰を持ち続けましよう。あきらめないでください。映画「ロード・オブ・ザ・リング 王の帰還」の中に、私の好きな場面があります。映画の大半は、勝てる見込みが低くても登場人物たちがあきらめない様子です。冥王サウロンの大軍は圧倒的な勢力で、なかなか倒せません。怪物のようで数もだんぜん多いのです。仲間たちの唯一の希望はフロドとサムのふたりです。この二人の旅も、見るに堪えないほどの苦勞の連続です。映画の終盤で、ふたりは使命を果たします。フロドは弱っていて、食料も水もありません。フロドはゴラムとの決死の戦いを終えたばかりでした。そして、崖に片手でぶら下がっています。深い淵には溶岩が赤く燃えています。フロドのもう一方の手は、ゴラムに指を食いちぎられ、出血しています。あきらめようとするフロドに親友サムが「手を離してはいけない。離さないで」と叫びます。フロドにはもうその力がないようでしたが、サムがフロドを捕まえて引き上げます。それから日が経ち、ふたりは汚れもすっかり落としてきれいな服を着ています。新しい王の戴冠式をみんなで祝います。王がふたりに近づいてくると、ふたりは王に腰をかがめました。これに対し、王はすべての民とともにふたりを称えます。小さくて、力もそう強くないふたりがあきらめずにやりとおしたことを王が称えたのです。

なんという大逆転でしょう。命からがらといった状態のふたりが、王国の英雄として称えられたのです。私たちが経験するこの世での信仰の葛藤や、天国での報いもこれに少し似ています。けれども、もっともっとすばらしいものです。ですから頑張っってください。あきらめないでください。勇敢に戦い、走るべき道のりを走っってください。信仰を持ち続けってください。

テモテ第二4:8「今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」

ここにある栄冠とは王が着ける王冠ではありません。勝者が受ける冠です。ローマの競技では、勝者は月桂樹の冠を受けました。ここにある義の栄冠とは、葉っぱの冠ではありません。永続する冠です。

報いを受けるためにクリスチャンでいることは自分本位だと思ったことがあります。もちろん、それだけが理由なら自分本位でしょう。私たちがキリストのうちにあるのは、神の愛のおかげです。私たちが神を愛するのは、神がまず私たちを愛してくださったからです。キリストがいてくださらなければ、私たちの霊はさまよい、死ぬ運命です。イエスが私たちのもとに来て私たちを救っってくださいます。死ぬ運命だったのが新しく生まれ変わらせてもらえるのはすばらしいものです。キリストにある私たちにそのようなことが起こるのだと聖書は語ります。

けれども、生まれたばかりの赤ちゃんが新生児のままにいることはありません。子どもは成長します。遊んで学びます。そしていつか大人になり、働きます。

デービッド・グジック師は言います。「パウロは報いに目を向けすぎだという人がいます。クリスチャンは天国での報いのことをあまり考えすぎないほうがよいと言うのです。しかし、神は天の報いを私たちのモチベーションとされます。十分にその価値があるからです。私たちにとって、今は踏ん張りどきです。その踏ん張りはやがて報われます。」

この個所で、栄冠は誰のものだと言っているでしょう。パウロのためであり、イエスの現れを慕うすべての者のためだと語ります。この現れとは、イエスが私たちを贖うために来てくださった最初のご降臨と、私たちを天に連れて行ってくださる再臨の両方を差します。その日には、私たちがこの世で生きていても、墓の中で骨が眠っていても、私たちを天に連れ帰っってくださいます。

ここでふたつ、注意していただきたいことがあります。ひとつめは、天での報いをどれくらいいただけるかということに気を取られすぎないことです。栄冠の大きさとらわれないでください。他の人より大きな栄冠をいただけるだろうか、小さくて恥ずかしい思いをするだろうか、と思悩まないでください。大切なのは、神のためにしっかり生きることです。愛と信仰に生きることです。神があなたの前に置いてくださった道のりをしっかり走っってください。

次に、報いと救いを混同しないことです。神の恵みを自力で獲得することはできません。神に愛して

もらうために良いことをするのではありません。神はご自身のご性質が愛であるから、あなたを愛してください。私たちがイエスのもとに来て、罪を取り去ってくださいと祈ると、イエスはそのとおりにして下さいます。私たちが罪を取り去っていただくのにふさわしいからではありません。神が私たちを愛して下さるからです。そして、私たちが神の御前にへりくだるなら、神は私たちを赦して下さるのです。これが、生まれ変わることです。この新生がクリスチャン人生の土台です。

コリント第一 3:11-15はこのことを明らかにします。「**3:11** というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。**3:12** もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、**3:13** 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。**3:14** もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。**3:15** もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」

イエス・キリストが土台です。イエスを信じていないなら、良い働きをしても益はありません。しかし、クリスチャンには土台があり、その土台の上に良い働きを築き上げます。このみことばには、金、銀、宝石、木、草、わらなど、どのように築き上げるか方法はいろいろあることが記されています。築いたものが火で試され、そして残ったものが永遠の宝となります。燃え尽きた物は無くなります。

良い働きとは何でしょう。その答えの鍵は、神との関係にあります。聖霊によって生きましょう。クリスチャンには聖霊が与えられています。神とのつながりが深まり、成長する中で、私たちは御霊の実を実らせませす。その実とは、愛、喜び、平安、忍耐、善意、親切、誠実、柔和、自制です。自力でこれらを体得しようとしても、なかなかできません。

御霊の実は、神が私たちのうちに働いて実るものです。神との関係を築くには、毎日聖書を読み、その教えに思いを巡らしましょう。神に祈り、思っていることや感じていることを神に伝えましょう。神がしてくださったことを感謝し、神をたたえましょう。この世の人生が終わる時に、天国に連れて行ってくれることを感謝しましょう。罪を告白しましょう。子どもに怒りを爆発させてしまったら、神に赦しを求めましょう。（子どもにも赦してと言いましょ。）誰かを憎んだり恨んだりしてしまったり、神に赦しを求め、良いことを思えるよう助けていただきましょう。プライドが高くなってしまったり、神に赦しを求め、適切な考え方ができるよう助けていただきましょう。自分の必要について祈りましょう。他の人の必要について祈りましょう。これらのことを毎日しましょう。

また、生活を変える覚悟をしましょう。あなたのしていることを止めるように神が導いておられると感じるなら、それが止められるよう力を与えてくださいと祈りましょう。そして、止める決意をしましょう。反対に、何かをするよう導きを感じるなら、それをしましょう。

このように生きるなら、私たちは喜びを見出すでしょう。そして遂には、天で報いを得るのです。私たちは栄冠を得ますが、それも最終的には神のものです。私たちはいただいた栄冠を神の御前にささげるのです。

黙示録 4 : 10-11 「**4:10** 二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。**4:11** 『主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。』」

神はそれにふさわしいお方です。あなたがクリスチャンなら、神はあなたをご自身の子としてくださいました。走るべき道のりを走り、賞を勝ち取りましょう。天の御父の目は、私たちに対する愛で輝いています。